

『源氏物語』 桐壺巻の文章構造—「けり」の用法から—

藤井 俊博

キーワード

いづれの御時にか、 けり、 なりけり、 梓構造、 気づき・詠嘆

要旨

本稿では、『源氏物語』桐壺巻の冒頭文の文構造と、桐壺巻の文章展開について分析を試みた。冒頭文の構造について、「やむごとなき際にはあらぬが」の「が」の同格説、主格説の検討を行い、「……連体形……連体形（人）」のような連体形を並列する構文を「～な人が～することがあった」という構文に仕立て直したと推定した。巻の文章構造については、巻の冒頭と結末の他、内容のまとまりの最終部分などの説的叙述で、「けり」、「ぞ・なん～ける」や「なりけり」などを用い、梓構造を作っていることを指摘した。

1. はじめに

「けり」は「テンス」の助動詞として「過去」と説かれるのが、学校文法や文法研究者の一般的な捉え方である。「き」も過去を表す専用の助動詞として用いられるが、物語地の文では物語の今に先立つ過去の事実を述べるとされる（物語時過去）。物語の地の文の「けり」の例も「過去」の助動詞とされることが多い。しかし、この語の来歴については未詳の点が多い。「き+あり」語源説や、『万葉集』の「来有」の表記から「来+有り」の語源を想定し、宣命で「来」で表され、執筆時に至るまでの継続を表す補助動詞的な例と関連づける説などがある。補助動詞的な「来+有り」が平安時代以降にいわれる「過去」や「気づき」と説かれる用法にどのようにして展開したかは大きな問題である。

小田（2015）は、上記の補助動詞的な意味をテンス的意味として「継承相」（過去に起こって現在まで持続している、または結果の及んでいる事態を表す）と「伝承相」（発話者がその事態の真実性について関与していない過去の事態を表す）に分け、認識的意味として「確認相」（気づかなかった事態に気づいたという認識の獲得を表す）があるとする。小田は時間的な認識に関わると捉えテンスと扱うが、「継続相」「伝承相」の「相」という用語から暗示されるように、語源的意味としてはアスペクト的な認識とも捉えられる性質を持つ。あるいは鈴木（1998）栗田岳（2008）のように、これを補助動詞的なものとして助動詞から外す立場もあり得よう。筆者は、小田が認識的意味とする「確認相」の意味（「気づき・詠嘆」＝モダリティ的意味）は、そのような「継続相」「伝承相」とされる意味から主観的意味として派生的に生まれたと考えることもできるのではないかと考えている。

語り手という虚構文学に独自の主体によって書かれる物語の地の文の「けり」の例は、

自然言語による日常会話の「けり」の用法をどのように反映するのかという問題もある。吉岡（1996）の調査によると、『源氏物語』の会話文、すなわち文学言語としての地の文の用法ではない自然言語的な用法では「気づき・詠嘆」用法が大部分を占めている。自然言語の延長に物語言語の用法が生まれるならば、地の文の例を過去と理解することは整合せず、物語地の文の例を過去とすることに疑問が生じる。物語の場面を過去のことと捉えるのは一見相応しいようであるが、それは物語の内容から読者が任意に想像することであり、「けり」自体が過去を表しているとは限らないからである。桜井（1985）は物語地の文の「けり」を主観的観念回想（詠嘆）を表すとし、「私ハ少シモ知ラナカッタガ」のニュアンスが含まれるとし、詠嘆の意味と関連づけている。このような考えによるなら、物語地の文の「けり」は小田の言う「確認相」の機能から捉えることも妥当であると考えられる。物語地の文の用法を「気づき」と言うのはそぐわないようだが、物語の古い時代に口承で伝えられた「語り」の段階で「実は～ということなのだ」というようなニュアンスで用いていたものが、文字化された物語の確認用法として定着するに至ったと考える。「けり」の物語での意味は、語り手が物語世界を「対象化」して捉えたことを示し、語り手による解説的な叙述を作るとともに、文章の区切りに用いるテキスト機能に繋がると思われる。すなわち、解説的な叙述は内容・場面の冒頭部や末尾部に現れやすく、固定化して「けり」は冒頭や末尾に用い内容の「枠」を作る機能を持つのである（藤井 2021）。

物語地の文の「けり」を過去の意味と捉えるのではなく、解説的機能やテキスト機能から捉える考えは、実際の用例から見て妥当性を持つのかを考えるのが小稿の目的である。本稿では、上記のような「けり」の意味機能を踏まえ、『源氏物語』桐壺の巻の文章構造の中でどのように「けり」が使用されているかを中心に分析していくことにする。

2. 『源氏物語』の冒頭文の構文

○いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき
際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

この著名な一文の構文は必ずしも明瞭ではない。「際にはあらぬが」の「が」は逆接の接続助詞とみると一見都合がよいようだが、この時代にはその用法は未成立であるという石垣（1955）の指摘により、この冒頭表現は同格もしくは主格の用法と考えられている。

現在注釈類で定着しているのは同格の格助詞ととる説である。同格用法は格助詞「の」に見えるが、「が」では例は少ないが、小田勝『実例詳解 古典文法総覧』によると、冒頭文を例として挙げるほか、次の2例を指摘している。

○短き△が袖がちなる△着て歩くも、みな美し（枕草子・144）

○故衛門督の北の方にて侍りし△が、尼になりて侍る△なむ、一人持ち侍りし女子を失
ひて後……（『源氏物語』夢の浮橋）

小田によると、同格の「が」の受ける句は消去型のモノ準体句であるため、想定される主名詞は文脈依存的とされ、『枕草子』の例では「衣」、『源氏物語』の例では、「人」が想

定されている。冒頭文のように「ありけり」の前に「人」を想定するなら、「……人ありけり」という物語・説話の冒頭、人物を提示して話を始める物語の慣用的な表現と符合する。注釈類で同格に訳したものとして新編日本古典文学全集が「最高の身分とはいえぬお方で格別に帝のご寵愛を被っていらっしゃるお方があった」とし、『岩波日本古典文学大系』『正訳 源氏物語 本文対照』（中野幸一訳）などでも同様に同格で訳している。

これに対し、日本語学の分野で古典語を研究する渡辺（1981）や小松（1988）は主格説の立場をとる。渡辺は式部の文章を「二つ以上の事柄を一文の中に描き込むような筆法」「関係づけ・位置づけの文章」とし、「女御、更衣がいらっしゃった」という事柄と「一人の、さほど高貴でない方が、とりわけ帝の寵を集めておられた」という事柄が「なかに」という関係を表す言葉でかみ合わせて表現されたと説く。小松は、「その文章は句節をつぎつぎと継ぎ足すことによって構成されているために、後続する部分に対する関係が、必ずしも厳密でない形をとる。したがって、その構文の基本原理は〈付かず離れず〉である」とし、そのような特性を持つ構文類型を「接続構文」と名付け、句節の相互関係を明確に限定する文体「拘束構文」と区別した。小松は「が」は主格の助詞以外にはあり得ないとし、「いとやんごとなき際にはあらぬが」という句節を、この部分に、このような形をとって無理なく挿入できるのは接続構文ならではの特徴であると述べ、「必ずしも最高の身分としては位置づけられない地位の女性が」と訳す。文章の特徴を踏まえての解釈であり、卓見と言うべきであろう。注釈類では主格説は少数で、「が」を「たいして重んじられる身分の家柄ではない女性が目立って寵愛を受けておられる（そういう）方がいたことだ」のように訳す新日本古典文学大系本がある程度である。上記のように、物語冒頭の慣用表現として人物提示とするために、文末に「人」を入れたが、そのままでは「～人が～人があった」のように主語が二つになり不自然になるため、「そういう（人）」を入れて構文を修正している。二重主語を解消するために、「給ふ・ありけり」を主語述語でなく「時めいていらっしゃった」と一連の述語表現と解する三木（1957）の説がある。

「主格」と取る解釈では、自然な日本語として理解するため、「ありけり」の前に「こと」などを補うことも考えられる。「～な人が～することがあった」のように「が」を主格にして「ことがあった」と訳しても意味が通じる。「～ことあり（けり）」の例は、本作中にも次のような例を見出せる。

○さるは、この五月ばかりより、例ならぬさまになやましくしたまふこともあり。
（宿木）

○二人の人の御心の中、古りず悲しく、あやにくなりし御思ひの盛にかき絶えては、いといみじけれど、あだなる御心は、慰むやなど試みたまふことも、やうやうありけり。
（蜻蛉）

ただ、「さぶらひ給ひける中に～ありけり」の対応関係から、やはり「人ありけり」と解すべきであろう。「が」を同格と取る解釈では、「が」が同格構文に用いる例が極少ない点が問題になる。ここでは、同格的な連体修飾語を並列した構文が見られることと関連づけ

て考察する。

○……御後見どもの中に、母のせうと、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろ仕う
まつるありけり。 (若菜上)

桐壺巻の後半で帝の寵愛を受ける藤壺女御についての解説箇所も、この構文と類似する。

○先帝の四の宮の、御かたちすぐれ給へる聞え、高くおはします、母后、世になくかし
づききこえ給ふを、…… (桐壺)

これらはいずれも「……連体形、……連体形(人)」という、二重修飾の例と解されよう(桐壺の例は「四の宮の」があるため三重である。「の」は一般には同格とされる例である)。桐壺の例は桐壺の更衣の解説する冒頭文と似ている点で注目されるが、「おはします(人)」は「かしづききこえ給ふ」という動作の目的語になる関係であるため、「が」を付けると不自然になってしまう。一方、若菜上の例は「～中に……連体形、……連体形(名詞)ありけり」のように説明できる構文であり冒頭文と酷似している。この「……連体形、……連体形(人)」構文は、属性と動作を修飾語とした「～(属性)な、(動作)する人」の構文であり小松のいう接続構文と言えよう。ただ、連体形を繰り返すのは口語的であり、やや落ち着きのない文となる。冒頭文では、主格の助詞「が」を加えて「～な人が～する」という主述構文を織り込んだ表現と解する前出の新日本古典文学大系の解釈が改めて支持される。これを同格「で」で訳すと冒頭からいささかぎごちない解釈になり、『源氏物語』特有の緩やかな文の結びつきを採る接続構文の特徴から外れてしまうのではないだろうか。

本稿では、主要な登場人物を指定する表現として「ありけり」で始まっていることに端を発し、このような語り手の解説に関わる「けり」の叙述が、桐壺の巻でどのように用いられているか考察する。

3. 桐壺巻の文章展開と「けり」の用法

前節で冒頭文の「ありけり」の解釈を見たが、この他、桐壺の巻では「けり」を文中・文末に取る例が見られる。最後にこの用法が物語の中で持つ役割について見ておきたい。

「けり」は、語り手の解説的口調として現れる。解説的口調は物語を俯瞰的に捉えて場面内容を確認するような箇所である。冒頭文の「(人)ありけり」という表現は、人物を物語世界に指定する表現であり、解説的表現の典型である。そこで次に「けり」と非「けり」に着目してその分布を見ていく。「けり」文は終止形と係り結びによる連体形に分ける。語り手の解説ばかりではなく具体的な場面描写の部分が含まれ、通常は動詞終止形で表される。そこで、動詞終止形を代表とする非「けり」文は、動作を表す動詞終止形で終わる文と、それ以外の文(何らかの語り手の判断を含む文)に分ける。次に桐壺の巻の全文(岩波日本古典文学大系本)をこれらの文末の表現形式によって次の記号で表す。

● = 「けり」(終止形)を文末に取る文

■ = 「ぞ～ける」の係り結びを文末に取る文

○ = 動詞終止形の文末で終わる文

□=動詞終止形以外の文末で終わる文(「き」「たり」「り」「なり」「なるべし」「なん(係助詞)」「ぬ」「べし」「べかめり」「ず」「あり」「おほかり」「を」「ぞかし」「形容詞終止形」など)※存在を表す「あり」「おほかり」は解説的叙述とみて動詞終止形でなく□に入れる。

● (①) ○□□□○□□□□□■ (②) ○□□□□□○□□○□○○○□○○□○○□□● (③) ○■ (④) ● (⑤) □○□□□○□■ (⑥) ○○○● (⑦) □□□○○○□□○● (⑧) ○□□□□○○● (⑨) ○● (⑩) ○○○□○○○○□□□□○● (⑪) □□□□□○○● (⑫) □□□□○■ (⑬) ○○○□■ (⑭) □■ (⑮) □○○○■ (⑯) ○○■ (⑰) ○□□● (⑱) □○□□□□□● (⑲) □○○□○○○○□○○□○○○□○□● (⑳) □□□○○□○○○○● (㉑) □□○□□□□○□□■ (㉒) □○○○○○○○○■ (㉓)

①から②の部分は□が大半であるが、桐壺更衣の解説に当たる。この間に○が二つあるが、具体的動作と言うより「そねみたまふ」「まじらひたまふ」は解説的内容である。□には「ず」「なり」「ぬ」「形容詞終止形(ことかぎりなし)」「き」「り」などが用いられるが、これらは解説のための叙述である。②以降から○が増え具体的場面が展開する構造である。「けり」は解説であるとともに、内容の区切りに用いていることが窺える。巻全体としては、上記の整理によると桐壺の巻は冒頭の「けり」文で始まり、末尾も「ける」で終わる。また、文尾に「けり」「ぞ～ける」をとる文は、展開部では2文に続けて用いる例は④⑤の箇所を除くと、全て非「けり」文を間に用いている。このことから、「けり」文は巻全体の枠を作るとともに、間を置いて用いられる「けり」文は内容の区切りに対応する面があると予測できる。藤井(2021)において、「けり」の枠には竹取物語などの枠は意図的と言うより解説的叙述が冒頭と末尾に用いられるために結果的にできた枠構造であるが、『今昔物語集』の天竺震旦部では意図的な枠を用いていることを指摘した。『源氏物語』では解説的内容をすべて「けり」で述べるわけではなく、意図的な使用と予測できる。例えば冒頭文に続く第2文「はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましき物におとしめそねみ給ふ」以降の文は桐壺の更衣をめぐる解説的な叙述であるが「けり」を用いていない。このことからわかるように、必ずしも解説的内容だから「けり」を用いるのではなく、テキスト機能を持たせるために「けり」の前後の「けり」を省略することもあると考えられる。このような文章機能を踏まえつつ、以下①～③の「けり」文の文章展開上の機能を検討していく。

「けり」は叙述の一定の区切りを果たしていると予測できる。すなわち内容のまとめや、予告的な内容に用いられると予測される。冒頭から順次見ていこう。

①いづれの御時にか。女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

②人より先にまゐり給ひて、やむごとなき御思ひ、なべてならず、御子たちなどもおほ

しませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほ、「わづらはしく、心苦しう」思ひ聞えさせ給ひける。

①の冒頭文に続く文「はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましき物におとしめそねみ給ふ」以降、「けり」の文末は②まで現れず「非けり」文が 11 文続いている。内容としては桐壺の更衣の寵愛と嫉み、その中での若宮の誕生までを描く部分が①～②の間の文の内容である。①の冒頭文は物語の始発として物語空間に一人の人物を措定する文であり、具体的な物語の動きは描かれていない。その意味では、この①～②の間の叙述は具体的な場面の描写は 1 つも無くすべて第一文の内容を敷衍した解説とも受け取れる内容であると言えよう。その点から言えば、①～②はすべて解説的叙述として「けり」で叙述してもよかったが冒頭と末尾を残して中間は「けり」を省略したと受け取れよう。②は、その直前にある文「……一の御子の女御はおぼし疑へり」を受けて、帝が女御の意見をけむたくもつらくもお思いになるのであったと解説する内容である。②に続く一文「かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ疵を求めたまふ人は多く、……なかなかなる物思ひをぞし給ふ」とあり、これも係り結びによる動詞文であるが、係り結びは解説的口調として「のである」の語感を含む。すなわち②と並列する内容として帝の寵愛の結果の及ぼす事態を解説的に叙述した文と解せよう。それに続く叙述は「御局は桐壺なり」ではじまり、新たな内容の始まりを示し、桐壺の更衣への迫害が一段と高まること述べる叙述が続く。ここで「けり」による②とそれに続く係り結びの一文で語り手らしい叙述が顔を出し、一応の区切りとしたと見ることもできる。すなわち、①と②は桐壺の更衣の寵愛とそねみ、その中での御子の誕生による影響などが書かれた解説的な部分としてまとまりを持つのであり、それらを枠として区切る意味で「けり」を省略した叙述を作ったと解される。

次の「けり」「ぞ～ける」は②から 23 文隔てた③の箇所である。この 23 文の内容は桐壺の更衣の迫害が一層厳しくなり病がちになり死去するまでの内容である。この部分では○の連続する部分もあり、場面の具体的描写を含んでいる。

③限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、「おなじ煙にも、のぼりなむ」

と、泣きこがれ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふ所に、いとかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかばかりかありけん。

③は、直前文の「よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、まして哀にいふかひなし。」を受けて、語り手が源氏のあわれな様を「心地、いかばかりかありけん」と推し量り、さらに人物の心情についてコメントを付したのである。

④内より御使あり、三位の位おくり給ふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。

⑤「女御」とだに言はせずなりぬるが、飽かず、口をしう思さるれば、「いま、一きざみの位をだに」と、贈らせ給ふなりけり。

③の後に一文を挟み、④⑤の「けり」文が続く。④⑤は連続した文であり、桐壺の巻で「けり」が連続する唯一の箇所である。④の「内より御使あり」は読点になっているが、

句点で区切る『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』のような解釈もある。句点に相当する切れ目があると解釈するなら、宣命使の来た事実を述べて、その様子についての語り手が続けてコメントしたのである。それに続く⑤は、宣命の内容についての語り手の解説を「なりけり」で書いている。④と⑤は、合わせて理解されるため、唯一例外的に連続したものであろう。

⑥「なき後まで、人の胸、あくまじかりける、人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほ、ゆるしなう、の給ひける。

⑥は、更衣亡き後も涙に浸る帝について、弘徽殿の女御の台詞を「ぞ～ける」で解説的に付け加えたのである。

⑦かやうの折は、御遊びなどせさせ給ひしに、心ことなる、物の音をかき鳴らし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは殊なりしけはひ・かたちの、面影につとそひて思さるるにも、「闇のうつつ」には、猶劣りけり。

⑦は、靱負命婦が更衣の母君を訪ね慰める場面の冒頭の場面描写である。これ以降は命婦と母君の具体的な行動や会話の描写が多くなり、それについての語り手の解説が多い。「かやうの折」は、直前の文の「夕月夜のをかしきほど」を受けて「うばたまの闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」（古今集・恋三・詠み人知らず）と語り手が夢とは異ならないという歌を引き合いに出して、寂しさを解説するのである。これ以降は命婦と母君の会話が続くが、その場面の解説に当たる部分と言えよう。

⑧宮は、大殿篋りにけり。

⑧は、命婦と母君の会話の途中で若君が寝てしまったことを解説する文である。

⑨若き人々、かなしきことは、さらにも言はず、内わたりを朝夕にならひて、いと、さうごうしく、うへの御有様など、思ひいで聞ゆれば、とく参りたまはんことを、そそのかし聞ゆれど、「かく、いまいましき身のそひたてまつらむも、いと、人聞き憂かるべし。又、見たてまつらでしばしもあらむは、いと後めたう」おもひきこえ給ひて、すがすがとも、えまゐらせたてまつり給はぬなりけり。

⑨は、命婦と母君の会話の場面の締め括り部分に見える解説的叙述である。命婦は母君のところから内裏に戻るが、若宮を参内させるべきかについて年若い女房達や祖母君がなお葛藤している様子を「なりけり」によって解説しつつ、この場面を締め括る。

⑩御前の壺前裁の、いと、おもしろき盛りなるを、御覽ずるやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房、四五人さぶらはせ給ひて、御物がたりせさせ給ふなりけり。

⑩は、命婦が内裏に戻った場面である。直前の文「命婦は、まだ、大殿篋らせ給はざりけるを、あはれに見たてまつる」を受けて、命婦が帝の様子を見ている視点に重ね、帝の様子を「なりけり」によって解説的に描写している。

⑪この頃の御気色を見たてまつる上人・女房などは、「かたはら痛し」と、聞きけり。

⑪は、帝が亡き更衣への哀傷する場面の中で、弘徽殿の女御が管弦の遊びをするのを見て周りの女房達のはらはらす場面である。直前の2文「風の音、蟲の音につけて、物の

み悲しうおぼさるるに、弘徽殿には、久しう、上の御局にも、參う上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで、遊びをぞし給ふなる。『いと、すさまじう、物し』と、聞し召す。」を受けての解説である。「この頃の御気色」とあり、人物の描写ではなく心情の解説であることが読み取れる。⑪直後の「いと、おしたち、かどかどしきところ物し給ふ御方にて、ことにもあらず思し消ちて、もてなし給ふなるべし」の一文も文末の「なるべし」と推量表現があり、語り手の視点が強く表れている箇所である。「月も入りぬ」であり、場面起こしの「ぬ」を伴い、場面が変わることが分かるので、場面の末尾に語り手がコメントを差し挟む箇所と言えるであろう。

⑫「さるべき契りこそは、おはしましけめ。そこらの、人の誇り・恨みをも、はばからせ給はず、この御事にふれたることをば、道理をも失はせ給ひ、今はた、かく世の中のことも、思しすてたるやうになり行くは、いと怠々しきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出でて、ささめき嘆きけり。

⑬も、「嘆きけり」は直前の「……陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて近うさぶらう限りは心ぐるしき御けしきを見たてまつり嘆く」の「嘆く」心情の内容を詳しく言い表し解説したのである。また、この箇所も次文に「月日経て……」と続くため、場面内容の終局部に用いて纏めていることも窺える。

⑭年ごろ馴れむつび聞え給ひつるを、見たてまつり置く悲しびをなむ、返々のたまひける。

⑮は、直前の「御子六つになり給ふ年なれば、このたびは思し知りてこひ泣き給ふ。」の一文の内容を詳しく描写して解説した文である。この例は、若宮の参内後に祖母北の方が死去する場面の最終箇所に用いた例でもある。

⑯女みこたち二所、この御腹におはしませど、なずらひ給ふべきだにぞ、なかりける。

⑰わざとの御学問はさる物にて、琴・笛の音にも雲井を響かし、すべて言ひつづけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき、人の御様なりける。

⑱⑲は、一文を挟んで用いている例である。参内した若宮の才と美貌を描写した箇所の最終箇所の例でもある。

⑳弁も、いと才かき博士にて、いひかはしたる事どもなむ、いと、興ありける。

㉑は、場面が変わって、高麗人が来朝し若宮を観相する場面で、若宮が優れた相をもつことを指摘されたとき、若宮の後見人の右大弁も含めて漢詩のやりとりがあったことを述べた箇所で、右大弁の解説として言及した箇所の例である

㉒おのづからことひろごりて、もらさせ給はねど、春宮の祖父大臣など、「いかなることにか」と、思し疑ひてなむありける。

㉓は、高麗人とのやりとりの中での若宮の才の素晴らしさを述べた箇所で、それを漏れ聞いた東宮の祖父大臣の心情について係り結びで解説的に言及した箇所である。

㉔「慰むや」と、さるべき人々をまゐらせたまへど、「なずらひに思さるるだに、いと、かたき世かな」と、うとましようのみ、よろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御

かたちすぐれ給へる聞え、高くおはします、母后、世になくかしづききこえ給ふを、上にさぶらふ内侍のすけは、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より、見たてまつり、今も、ほの見たてまつりて、「失せ給ひにし宮す所の御かたちに、似給へる人を、三代の宮づかへにつたはりぬるに、え見たてまつりつけぬに、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて、生ひ出でさせ給へりけれ。ありがたき御かたち人になむ」と奏しけるに、「まことにや」と御心とまりて、ねんごろに聞えさせ給ひけり。

⑱は、藤壺入内の経緯を述べる冒頭箇所例である。「先帝の四の宮の、御かたちすぐれ給へる聞え、高くおはします、母后、世になくかしづききこえ給ふを、」と、藤壺の属性を「四の宮の」「おはします」「きこえ給ふ」の三つの同格表現で紹介している。さらに「上にさぶらふ内侍のすけは、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より、見たてまつり」と続け、「今も、ほの見たてまつりて」と同表現を繰り返した上で、内侍が桐壺の更衣とそっくりな容貌を持つと奏上し、その結果帝が入内を申し入れるまでの内容を一気に叙述している。桐壺の巻の中で最も長い文であり、多くの内容を一文で述べている。藤壺を紹介する表現は、冒頭の桐壺の更衣の紹介箇所と類似した表現方法を用いており、冒頭の「が」の解釈の補助になろう。また「馴れたりければ」「奏しけるに」のように文中の「けり」が含まれる点から、解説文としての性格を指摘することもできる。

⑲おぼしまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなく思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

⑲は、⑱の姫宮について「藤壺と聞こゆ」と名を紹介し、「げに、御かたち有様、あやしきまでぞ、おぼえ給へる」と係り結び構文で容貌が桐壺とそっくりであることを解説し、「これは、人の際まさりて、思ひなしめでたく、人も、え貶しめ聞え給はねば、うけばりて飽かぬことなし」「かれは、人の許し聞えざりしに、御心ざし、あやにくなりしぞかし」と、藤壺は誰も非難できないが、桐壺は寵愛の深さ故に周囲に認められなかったと対比している。そのような説明を受けて、帝が藤壺に心移していくことを「あはれなるわざなりけり」と「なりけり」によって感懐を込めて解説するのである。

⑳引入の大臣の、みこ腹にただ一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御けしきあるを、おぼし煩ふことありけるは、この君にたてまつらむの御心なりけり。

㉑は、「……ありけるは、……なりけり」のような主題+題述の解説構文での使用である。源氏の元服の描写の後、加冠した大臣が「〈東宮から娘の姫を所望されて〉思しわづらふことありける」ことの理由を、実は源氏の妻にしようという気持ちがあったからだ、帝の心情の理由の説明をする文脈である。これは次節で述べるように、和歌の「～ものは～なりけり」構文の応用と解される。

㉒その日の御前の折櫃物、籠物など、右大辨なむ、うけたまはりて仕うまつらせける。

㉓は、「なむ～ける」であるが、これは直前の文「御階のもとに、親王たち・上達部つら

ねて、祿ども、しなじなに賜はり給ふ」の文を受けて、その「祿」の中身の解説に当たる。これに続く「屯食、祿の唐櫃どもなど、所狭きまで、春宮の御元服の折にも、数まされり」「なかなか、限りもなく厳しうなむ」などもその解説の続きであるが、文末を変化させ「けり」を連続して用いていない。これは「厳しうなむ」は「ありける」の省略であろう。

②心の中には、ただ藤壺の御ありさまを、「たぐひなし」と思ひきこえて、「さやうならむ人をこそ見め。似る人なくも、おはしけるかな。大殿の君、『いと、をかしげに、かしづかれたる人』とは見ゆれど、心にもつかず」おぼえ給ひて、幼きほどの御ひとへ心にかかりて、いと苦しきまでぞ、おはしける。

②は直前の「源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心安く里住みもえし給はず」を受けける心情の解説である。源氏は、左大臣の賀になるが帝に召されることが多く心が落ち着かない、その中で、帝から寵愛をうける藤壺に思慕の念を寄せるのである。源氏の心理を語り手の解説として対象化して描くのである。

③『「光る君」といふ名は、高麗人の愛で聞えて、つけたてまつりける」とぞ、いひ伝へたるとなむ。

③は桐壺の巻の終局部に用いた「ける」の例である。係助詞なしに連体形「ける」となるのは「名は」を承けて「付けたのである」と対応させ「～は～けるなり」の説明構文を作るが、「なり」が略されて連体形になった形と解される。直前で内裏における源氏に仕える人々や邸宅のすばらしさと、その中での藤壺を慕う心理が書かれ、巻全体のまとめとして書かれている。巻末では光源氏と藤壺を「世に類なし」と見たてまつり給ひ、名だかうおはする宮の御かたちにも、なほ、にほはしきは、譬へん方なく美しげなるを、世の人「光る君」ときこゆ。藤壺ならび給ひて、御おぼえも、とりどりなれば、「かがやく日の宮」ときこゆ。」と名付けの記述があり、それを受け「光る君」の意味を語り手が解説したのである。続く「とぞ、いひ伝へたるとなむ」は、語り手からの言述で、巻末において語り手が顕現し巻を閉じる構造をとっている。これは冒頭で語り手が「いづれの御時（いつの御世のことであろうか）」と呟いて始まったのと呼応関係にあり、語り手での言説が巻全体の大枠を形成していると解される。最後に「とぞ～たる」「となむ」と二重の引用で物語世界を対象化するのは「となむ語り伝へたるとや」とする『今昔物語集』と同じである。「とぞ」により物語の伝承をも対象化して、言い伝えていることを含め物語内容とする。それをさらに対象化するのが「となむ」で、「本に侍る」などが補えるため物語の架空性がより強調される。

以上見たように、物語の場面状況や人物心理などの直前の文内容を受けた解説的な文において「けり」は用いられる。冒頭や特に場面の結末部に「けり」をとることや、2文連続で「けり」を取らないことなど、テキスト機能を意識した「けり」の使用傾向が認められる。

文法論では「けり」はテンス的な意味として説明しようとするが、このような使用実態に即した説明はしがたい。「けり」は語り手の解説的立場の表れと理解すべきと考えられる。

4. 「けり」活用形別の前接語の傾向

前節で「けり」の文脈の特徴を考察した結果、解説的な箇所や、内容の区切りに関わる箇所での使用が目立つことが明らかになった。本節では、そのような解説的な箇所に用いることによる特徴が前接する語に見出せるのではないかと考え、文末用法と文中用法に分けて、前接語の傾向を見ておく。前接語について、一般的な動詞に付くか、状態的なラ変形の動詞に付くか、断定のラ変型助動詞「なり」につくか、などの面から傾向を見ていく。

4.1. 文末「けり」の終止法の前接語

文末用法の「けり」を終止形「けり」、係り結びの「ぞ～ける」「なん～ける」に分けて前接語を次に示す。推量の意味を含む「けん」も「けり」に近い内容と考えて加えた。

「けり」の前接語＝「なり」5例「動詞」5例「あり」1例

「けん」の前接語＝「あり」1例

「ぞ～ける」の前接語＝「動詞」2例「なり」1例「おはす」1例「形容詞」1例

「なん～ける」＝「あり」2例「動詞」2例「なり」1例

これらから、「なり」を始めとするラ変動詞「あり」を含む語、もしくは「おはす」のような存在を表す語につきやすい傾向が窺える。

文末で単に「あり」で終わる例は、桐壺の巻では次の1例のみである。

○まう上り給ふにも、あまりうちしきる折々は、打橋・渡殿のここかしこの道に、あやしき業をしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたう、まさなきことどもあり。

一方「ありけり」で終わる例は総計4例（「けり」「ありけん」「なん～ける」の前接語）であり（前節の例①③⑫⑯）、動詞「あり」は「けり」と結合しやすいことが窺える。

『源氏物語』全体で地の文文末の「あり」は188例であるのに対し「ありけり」は52例が見られる（中納言〈日本語歴史コーパス〉の検索による）。比較のために動詞終止形の文末で最も例の多い「給ふ」は2502例見えるのに対し、「給ひけり」は57例に過ぎず、「ありけり」の比率が高いことがわかる。動詞「あり」を後接する例は、①のように人物を提示し解説する表現のほか、③のような判断辞に近い例がある一方、⑫⑯のような具体的な場面や心理の描写など用法には幅がある。「あり」は存在詞として、動作そのものの描写ではなく語り手の判断による静的な状況や重要な人物の提示という面があろう。これが解説的な「けり」と結びつきやすい理由であろうと思われる。

「けり」の解説的機能は、「なりけり」の形式において最も典型的に窺える。「なりけり」は『源氏物語』全体では373例もの例が見られる（「中納言」による）。「なり」の終止は桐壺の巻で10例があるが、「なりけり」では、「～だったのだ」というような詠嘆的な口調で解説を加えるような語感が備わることが指摘できる。「なりけり」の語性について、小田勝（2010）は、『源氏物語』に「動詞＋しなりけり」という例が次のように2例あることから「なりけり」が複合辞化していることを指摘している。

○……契り深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたのことは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり。

〈地の文〉(若菜上)

○「……この二月には、水の少なかりしかばよかりしなりけり。」〈会話文〉(宿木)

「し」によって過去の事態をとりあげて、そのことを「なりけり」により説明的に表示する言い方が成り立っている。特に上記の若菜上の例は地の文の例であり、語り手の口調にそのような過去の「し」とは異なる文法的意味で用いる意識があったことは明らかである。

「なりけり」は和歌的な表現として「～ものは～なりけり」のような類型で和歌の中に多く用いられたことを秋本(1970)が指摘している。桐壺の巻でも、桐壺の更衣が死の間際に詠んだ物語中最初の和歌もその形式をとっている。

○かざりとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

このような歌の表現形式が物語地の文に影響していることが考えられる。前節に挙げた前出の⑩の例は、「～けるは～なりけり」の「主題+説明」の構文で、語り手の判断文の中に解説口調がよく現れている例であるが、このような和歌的な表現と重なる。

⑩引入の大臣の、みこ腹にただ一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御けしきあるを、おぼし煩ふことありけるは、この君にたてまつらむの御心なりけり。

この「～は～なり」の構文は、次例のような「～は～なるべし」の例も見られる。「べし」の主観的用法と同様に「けり」も認識論的な確認の意味を持つと類推できるであろう。

○右近のつかさの宿直申しの声聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。

和文の文章構成と「なりけり」の関係については、糸井(1974)(1977)の論がある。糸井(1974)では、『土佐日記』が仮名文の文章を創作するに際し、「なりけり」を含む和歌や地の文の表現を、話題・感動の頂点にそれを置き内容に区切りをつけていると説く。糸井(1977)では「なりけり」の表現価値とは、物語の文脈の中で、漠然としていた事柄への興味に一つの結論を提示し一つの頂点を形成する一方、新しい緊張を設定するといった効果をも発揮するところにみられる」と指摘する。『源氏物語』における地の文の「なりけり」の使用特徴については、本作の全用例を検討した北川(2007)の論が詳しい。北川は、「なりけり」を語り手の聞き手(読み手)に向けた解説表現として捉え、「実は～だったのだ」の意味で感想・評価・心情を具体的に表す説明的な特徴が認められるとした。具体的表現としては、「心なりけり」「思ふなりけり」などをはじめとする形式で心中思惟を解説する点に特徴を持つことを指摘している。

以上のように、「けり」述語文は、冒頭文の「ありけり」のような「人物の紹介」の箇所や、「人物の考え・行動の説明」などに展開上重要な箇所、重要な情報などに「ぞ・なむ～ける」や「なりけり」などの形で多く用いられている特徴を指摘することができる。なお、文末で「なむ・ぞ～ける」の係り結びを用いるのは、②「心苦しう」④「悲しき」⑥「あくまじかりける」⑬「悲しび」⑮「うたて」⑯「興あり」⑰「思し疑ひ」⑳「苦しき」など心情表現を強調する場面に集中していることも合わせて指摘しておく。これらの側面の

合わさった④「その宣命読むなん、悲しきことなりける」は、その典型である。

4.2. 「けり」の文中用法の前接語

次に文中用法として「ける」「けれ」の前接語を確認しておく。

(1)連体形「ける」が名詞を後接する用法の前接語

⇒「ざり」2例「り」1例「動詞」1例

冒頭文の動詞を前接する例「あまたさぶらひける中に」においても連体用法が見られるが、「さぶらふ」は多くいることであり、ラ変動詞「あり」とも意味的に通う。「動詞+ざりける+名詞」は『源氏物語』全体で27例が見られる。その他は「り」のようにラ変型の表現が付いている例がある（「中納言」によると『源氏物語』全体では13例）。

○をかしき御贈り物など、あるべきをりにもあらねば、ただ、「かの御かたみに」とて、「かかるようもや」と、残し給へりける御装束一くだり、御髪上の調度めく物、そへたまふ。

(2)連体形「ける」が助詞（は・を・に）を後接する場合の前接語

⇒「ざり」2例「あり」2例「たり」1例「動詞」2例

やはりラ変動詞に偏って用いられている。

(3)已然形「けれ」が「ば・ど」を後接する場合の前接語

⇒「動詞」3例「あり」1例「たり」1例「ざり」1例「おはす」1例

文中の已然形も、ラ変動詞の存在・状態を表す語に付きやすいことがわかる。

また、動詞に付く例もあるが、次のように解説的な文脈であると解されるであろう。

○おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にも、故ある、事のふしふしには、まづ参う上らせ給ひ、ある時には、大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせ給ひなど、あながちに、御前去らず、もてなさせ給ひし程に、おのづから、かるきかたにも見えしを、この御子生まれ給ひて後は、いと心ことにおもほし掟てたれば、「坊にも、ようせずば、この御子の居給ふべきなめり」と、一の御子の女御は思し疑へり。

○内にも、御けしき賜はらせ給ひければ、「さらば、この折の後見なかめるを、添臥にも」と、催させ給ひければ、さ思したり。

5. まとめ

小稿では桐壺巻の「けり」に絞って取り上げた。物語地の文の「けり」を過去の助動詞と理解するのは問題があり、「実は～だったのだ」のように語り手の解説的な口調の表れとして用いられたと解される。特にテキスト機能としては、内容のまとまりを作るなどの面で意図的な使用がなされていると解された。「実は～だったのだ」という解釈は「なりけり」構文の典型的な訳であるが、単独の「けり」であっても認識的意味としてこのような含意が認め得ると思われる。和歌的な表現である「なりけり」や係り結びが、物語の心理描写

において活用されている点も注意すべきところであろう。『源氏物語』の「けり」は、係り結びや「なりけり」表現とも相俟ち、語りの場からの言説として現れるのである。

『源氏物語』は「いづれの御世」のことかわからないと語り手が述べる空物語である。虚構の空物語に読み手と関わる時間軸は想定されないが、読み手は実際の過去の話と捉える自由もある。しかし、文字通り読めば架空の話と解され、本稿で見たような「けり」の説明的な使用法も「過去」という時間の面から理解することは難しい。物語の助動詞を「過去」と理解し、「た」と訳せば済むという理解は、学校教育の中で刷り込まれた感覚であろう。研究者も含め、物語を読む際には「けり」の中に潜む役割を見直すべきと考える。

【参考文献】

- 秋本守英（1970）「「なりけり」構文統貂一「ものは」の提示を中心として」『王朝』三冊
- 石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』（岩波書店）
- 糸井通浩（1974）「貫之の文章一仮名文の構想と「なりけり」表現一」『王朝 遠藤嘉基博士古稀記念論集』（洛文社）
- 糸井通浩（1977）『「なりけり」語法の表現価値一「桐壺」「若菜下」を中心に一』『國文學』22-1
- 小田勝（2017）『事例詳解古典文法総覧』（和泉書院）
- 小田勝（2010）『古典文法詳説』（おうふう）
- 北川真理（2007）『「源氏物語」の文末表現序説一「なりけり」の表現形式を中心に一』『物語研究』7
- 栗田岳（2008）「続紀宣命のケリと来」『萬葉』201
- 小松英雄（1988）『仮名文の原理』（笠間書院）
- 桜井光昭（1985）「回想の助動詞再説一国語教育のため一」（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学）』34）
- 鈴木泰（1998）「助動詞からのぞかれるべき「けり」について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』（汲古書院）
- 三木幸信（1957）「いづれの御時にか」『女子大國文』7
- 渡辺実（1981）『平安朝文章史』（東京大学出版会）
- 吉岡曠（1996）『物語の語り手 内発的文学史の試み』（笠間書院）
- 拙稿（2021）『「伊曾保物語」の助動詞と枠構造 ナラトロジーから見た解釈』『[研究プロジェクト] 時間と言語』（ひつじ書房）